

# 山本正志のバルト3国旅行記

リトアニア・ラトヴィア・エストニア 8日間の旅 2006-6-8 ~ 15

## 6月8日

わが家を午前6時、出発。関西空港シャトルタクシーにはすでに市原からの芦田先生御夫妻、畠山さん、初参加の山下さんが。小森さん、母袋さんを加えて満席となり宇治インターから高速道路へ。

関西空港ロビーで一年ぶりの顔ぶれとも再会、フィンエア機に塔乗、約9時間。午後8時45分ヘルシンキ空港着陸。日本との時差6時間。気温15 晴。

ビリニュス行きは16時20分発の予定がなぜか17時20分に。結局1時間も待ち時間が。ロビーで現地生ビールを1パイ。いよいよ塔乗、リトアニア航空機は双発のターボプロップ機。席は3列、機内サービスは有料で注文した人だけに料理が出される。

18時30分ビリニュス着。入国審査はチラッと見る

だけでいと簡単。現地ガイドのユナスさんは大学の先生で日本に来たこともあり日本語は流暢。バスでホテルサルナスへ。

部屋は2階で越中さんと同室。やはり午前6時から20時間の長旅、初日はきびしい、眠い。簡単な食事を終えて部屋の窓からのぞくと午後10時なのにまだ明るい空に熱気球が2機フワリと。



## 9日

朝4時になると外は明るい。越中さんと散歩。川のほとりに古い教会が。1640年代の建築とある。今日の予定に入っている聖ペテロ&パウロ教会。(写真)

午前中はバロックの街とよばれるビリニュスの旧市街を徒歩観光。たくさんの18世紀のバロック様式の建築群の中でまず聖ペテロ&パウロ教会。

中に入って高い天井まで素晴らしい彫刻。次は大聖堂。こどもたちの集団と先生だろうか、静かに説明を聞いている。



入口二階にはすばらしい装飾のパイプオルガン。国立民族博物館の前を  
通って小さなケーブルカーで山頂のゲディミナス城へ。

旧市内部のパノラマが一望、世界遺産に指定されている。ネリス川  
沿いに開けた街には多くの教会やビリニウス大学も。

次はビリニウス大学。どうやら入構するのに料金がいるらしい。試  
験中ということで授業風景は見学できなかった。大学の学食のテーブルの間をぬけて裏通りへ出るとにぎ  
やかなブティック街。そしてナポレオンが「みやげ



聖アンナ教会

に持って帰りたい」といった  
とかいわなかったとかのへ。

外見も瀟洒な教会だが中に入  
るとステンドグラスが鮮やか

なことに驚き。まちにこども  
たちが多いと思ったら今日から夏休み。2学期は9月からという。3カ月

近い休みが続くことになるが学力はどうなるのかな？ というよけいな心  
配を。

旧市街のレストラン“ロッシーニ”で昼食の後は、市内から26キロの  
ところにある森と湖に囲まれた中世の古城・トラカイ城に向かう。かつてリトアニアの首都でも  
あったトラカイの城内を見学。近くに少数民族のカライム族の  
ユダヤ教会も。広場で新婚のカップルが仲間とともに。突然の  
風雨で少し冷える。

旧市内にもどって夜明けの門へ。ホテルにもどって、夕食は  
レストラン“マルツェリユクス・クレティス”で。ここで金森  
さんが「今日は宮田さんの誕生日です」と紹介。一同乾杯。宮  
田さんは教員退職したそうだがじつは神主さんだそうだ。夜の  
9時半というのにまだ陽は沈まない。



ゲディミナス城



展望台からの眺望



トラカイ城

## 10日

ホテルで朝食、リトアニア第2の都市カウナスへ。今日は気  
温も上がり好天気。ユーナスさんによると昨日の寒気は当地  
の人たちにとっても異常気象ということらしい。しかし冬場  
はマイナス35にもなるというから気象はロシアと変わらない。

バスの中で自己紹介。やがてユダヤ人に“命のビザ”を出  
した日本領事・杉原千畝ゆかりのを訪門。意外

と小さな建物（3階建）。この狭い道路に多くのユダヤ人たちが押しかけたのかと想像する。約  
15分間のビデオの上映。



旧日本領事館

1940年、リトアニアで領事代理を務めていた杉原は、外務省の命令に逆らって、六千人を越えるユダヤ人にビザを発給し続けた。

ビザを求めるユダヤ人たちが大挙して領事館に押し寄せてきたのは7月18日の早朝でした。ナチスに追われた彼らは日本を通過してアメリカなどに逃げようと考えていたのです。(中略) 外務省から「発給してはならぬ」という返事が来たとき、すでに心は決まっていた。千畝は朝から晩まで昼食をとらずにひたすらビザを書き続けました。主人は大使にはなれなかったけど、外交官としての役割は十分に果たしたのではないのでしょうか  
(杉原未亡人の回想録より)

午後2時遅い昼食の後には第9要塞へ。

1941~1944年の4年間に、リトアニアを占領していたドイツのナチス軍は、カウナス市郊外にあった第9要塞収容所に駆り集めたユダヤ人など約5万人を殺害した。その処刑場の跡に建てられた巨大なモニュメント。右は「死」を左は「蘇り」を、中央は「希望」を表す。炎が燃え上がったような先端には怒りを表す拳(こぶし)が刻まれている。ナチスと杉原、あまりにも対照的な象徴の町、カウナス。

ホテルに帰ってホテル内のレストランで夕食。

それにしてもこの国の若い連中は大型バイクが好きだ。町じゅうを暴走族が疾走していて交差点ではすべての車がストップということにも出くわした。カフェの前にはホンダのゴールドウィング、ヤマハのバルカン2000、もちろんハーレーダビッドソンやドカティ、BMWもある。中にはトライク(バイク3輪車)を先頭にした一団も見かけたが、月収4万円程度というからどうして100万、200万のバイクが買えるのだろうか。それともドイツ・フランスあたりからの遠征組だろうか。ホテル前にあったはアイアンホース。



第9要塞収容所(上)とモニュメント(下)



旧市庁舎 白鳥に例えられる。バロック様式で現在は結婚登記所



朝のカウナス聖ミカエル教会



スーパーバイク

## 11日

カウナス出発、ラトヴィアの首都リガへ向かう。途中制圧された民族の思いを込めた十字架が今も建て続けられている“ ”へ。鈴なりにかけられたロザリオ、丘の上にある聖母像など今も来る人が絶えない。



十字架の丘

国境を越えてラトビアに入り、首都リガへ向かう。バスの中で長砂先生をはじめ、参加者が自分の専門分野のことを照会するミニ講座。長砂先生は「21世紀社会主義の展望」芦田先生はバルト3国の農業とロシア農業のそれぞれの特徴、人形劇の西川さんは生徒たちの鑑賞する態度と人形劇創作の思いを語る。越中さんは自分の身体のこともあり、中国漢方薬の話、山崎先生は老人クラブ会長としての運営の工夫と脳の活性化のための頭の体操、小森さんのワコール入社以来の研究に打ち込んできた姿勢と熱意にはみんな感動！小森さんの誕生日は6月12日、明日だ！水野さんは牛乳屋さんだが世界中飛び回っておりBSE問題についてもさすがに鋭い考察。

予定より早く4時過ぎにホテルに到着。チェックインして外出、旧市街にむかう。この町でもホテルのインターネットは日本語表示ができない。広場を歩いているとあった！インターネットカフェ。さっそく日本の情報にアクセス。9日の京都会館の集会は2500人参加で成功、その他は株価が下がっていたのと、阪神が首位に。午後7時ホテルのレストランで夕食。

## 12日

今日は、リガ旧市街の徒歩観光、日本語ガイドはユリアさん。リガ城は大統領官邸として使われている。聖ペテロ教会、などそれぞれ歴史がある。“バルトのベルサイユ”と称されるルンダーレ宮殿へ。森に囲まれたバロック建築の傑作、豪華絢爛な内装の“黄金の間”など。宮殿のレストランで昼食、リガに戻る。午後4時、ラトビア民族野外博物館へ。18世紀からの木造建築農家風の建物や教会など。リガ市内でが軒を連ねる町並みを歩いて観光。



聖ペテロ教会



ルンダーレ宮殿



ブラックヘッドのギルド



アールヌーボーの建築



小森さんの誕生日

夕食はレストラン“ クラスタ・リド“ で民族料理。今日は。ワインで乾杯。ホテルへの帰途、私はリガ旧市内で途中下車、インターネットで日本の情報にアクセス。ワールドカップ対オーストラリア戦は前半1点のリードを後半3点取られて敗退。その他大きな事件などなし。ただし国会は最後の1週間を迎えて対決の山場。医療保健法案、教育基本法案、国民投票法案、共同謀議法案などが果たしてどうなることか。

## 13日

ホテルで朝食。ホテルで朝食。毎朝畠山さんからおにぎりのサービス。ご自分の食事管理のために炊飯の道具をもってこられたそう。旅先でお米のおにぎりはありがたい。

バスでエストニアの古都タルトゥへ。バスの中でのミニ講座は杉本先生。木全さん。畠山さん。正路さん。山崎先生。途中、ツエースイスでリヴォニア騎士団の城跡に立ち寄る。(写真 )



国境を越えてエストニア入国。2時前にやっとタルトゥ到着、レストランで昼食。日本語ガイドはミヤノ・エリさん。タリンに向かう。

6時30分、タリンのホテル到着、しかし、ホテル向いの野外施設で今夜(アメリカのロックバンド)

のライブがあるということで、若者が続々とつめかけている。周辺をのぞいて見たが中では大音響の演奏なのかすごくもりあがっている。翌日ミヤノ・エリさんの話ではヨーロッパ各国から若者が7万8千人くらい集まったという。



メタリカのライブ会場

ホテル内のレストランで夕食の後、海辺が近いというので行って見た。だれも長い長い砂原で泳いでいなかったのがポリスに「泳いでもいいか」とたずねると「罰をうけるぞ」とのことであきらめた。



午後10時過ぎまで日が沈まないの、浜辺で港のフェリーを見ながら日没を写真に。野外ライブコンサートも12時で花火が打ち上げられてお終い。数万人の若者が広い道幅いっぱい帰っていく。西川、山崎、越中3氏とビール談義。

バルト諸国は、合唱が国の文化として根付いており、どの国でも大規模な合唱祭があります。人口150万人ほどのエストニアの首都タリンで1999年に催された合唱祭には、合唱団員2万人、聴衆10万人以上、合わせて12万人強が参加したといわれています。100年以上前から5年に一回催されるこの合唱祭に向けて、2年前に課題曲が発表され、全国各地でレッスンです。合唱祭の折

には首都タリンの学校などが全国から馳せ参じる合唱団員の宿舎として開放され、炊き出しが用意されます。開会式で大統領が記念演説をするこの合唱祭は、文字どおり国をあげての祭典です。この合唱祭につきものの曲『我が祖国 我が愛』は、エストニアの第二の国歌とも言うべき歌です。1945年にソ連に併合されて以来、この曲は当局によって演奏が禁止され、この曲の作曲者は合唱祭を含む公の活動が阻まれていました。ところが、1960年の合唱祭で、4万とも6万とも言われる聴衆から自然にこの曲の合唱が湧き起こったのです。この合唱祭を契機に『我が祖国 我が愛』は再び演奏を認められました。それから約四半世紀、エストニアを含むバルト三国のソ連からの独立運動は、エストニアでは"歌う革命"と呼ばれました。特殊部隊や戦車を繰り出すモスクワ政府に対し、民衆は暴力ではなく歌とスクラムで立ち向かいました。エストニア人にとって、合唱とは民族のよりどころ、アイデンティティそのものなのです



午前はタリン観光。ガイドのミヤノ・エリさんはこちらに住んで10年、大学で日本語を教えている。現在日本語教員は3名とのこと。エストニア最大の歌と踊りの祭典が開かれる「歌の広場」カドリオルグ公園。なにしろ舞台上で3万人（3千人ではない！）が歌うと言うのだから驚く。カドリオルグ宮殿はロシアのピョートル大帝が妃エカテリーナのために離宮と公園を作らせたもの。



カドリオルグ宮殿

今日は公園の公邸や町中の家々の国旗に黒い喪章がつけられている。ミヤノ・エリさんの解説によると1941年6月にソ連全域でエストニア人が強制移住させられ、1949年にも強制移住があり、多数の犠牲者がでたことを現在も忘れないということでの意思表示という。は城壁で囲まれており、世界遺産に指定されているだけあって、古風な町並みがある。



タリン旧市街地



「太っちょマルガリータ」の壁の厚さは最大6.5mもある。

旧市街地は支配者（騎士）の居住地 = 「山の手」と市民たちの居住地 = 「下町」で分かれており城壁で隔離されている。狭い通路の階段は両者の当時の対立と警戒の中での生活を物語っている。旧市街地には「機関車トーマス号」も観光客を乗せて走っている。

昼食後、タリン近郊にある“ ロツカ・アル・マーレ ”を訪れ、17 世紀から今世紀初頭のエストニア各地の木造建築が展示されている野外博物館を見学。

5 時前にホテルに戻り、午後 8 時の夕食まで時間があるのでバスに乗り、ヨットハーバーのあるピリタへ。ここは海水浴場がある。いそいで海に入るが砂浜が遠浅で 100m ほど沖に出ても膝くらいしかない。しかし腰からお腹くらいまでの深さになると、水が冷たい。遊泳したが、さすがに長い時間水中に続けてというわけにできなかった。砂浜で日光浴をして再び海へ。

周りは若者やおばさんたちであふれ返っているが目のやり場がない。とにかく少しでも肌を露出して、というのがこの国の女性の夏の過ごし方らしい。レストランで民族音楽とフォークダンスを楽しみながら最後の夕食。



## 15日



ヘルシンキ港

今日で最後、港へ向かい船でヘルシンキへ。ジェット・ホイルの高速船は時速40ノット（70km）くらいか。到着後、市内観光、日本語ガイドはエグチ・マユミさん。最初に元老院広場。中央にはロシア皇帝アレクサンダー2世の像が立ち、北側には威風堂々としたヘルシンキ大聖堂(写真下)、西側にはヘル

シンキ大学、東側には官庁が立ち並んでいる。次に岩の中に造られたテンペリアウキオ教会。レストラン“サーガ”での昼食は山崎先生の誕生祝賀会、小森さんが港の広場で買ってきた果物をテーブルに盛り、みんながひとつずつお祝いを述べ、祝福した。その後、空港へ移動、出国手続きを経て帰国の途に。16日午前無事関西空港に着陸。



テンペリアウキオ教会



**ハンザ同盟**は、中世後期に北ドイツを中心にバルト海沿岸地域の貿易を独占し、ヨーロッパ北部の経済圏を支配した都市同盟。「ハンザ (hanse)」はドイツ語で「団体」を意味し、もともと都市の間を交易してまわる商人の組合的団体のことを指した。ハンザ同盟の中核を占める北ドイツの都市は神聖ローマ帝国の中で皇帝に直接忠誠を誓う帝国都市であり、相互に独立性と平等性を保つ緩やかな同盟であったが、経済的連合にとどまらず、時には政治的・軍事的連合として機能した。しかし同盟の中央機構は存在せず、同盟の決定に拘束力も弱かったため、政策においてはそれぞれの都市の利害が優先された。15世紀の最盛期には加盟都市は200を越えた。政治的・軍事的連合としてのハンザ同盟は、1370年、1435年の2度にわたってデンマークとの戦争に勝利して諸特権を認めさせた。しかし15世紀にはカルマル同盟を結んで北欧諸国を統合したデンマークに敗れてバルト海の覇権を失った。

帰国後、6月26日に日本ユーラシア協会京都府連理事長の吉田さんからのメールを受け取った。「ところで、昨日、昨年コンサートを実施したドリームガーデンのメンバーであるストゥパーク氏からメールが届き先日リガで公演（6月9日～14日）した際に街で確かに山本さんの姿を見かけたというのです。そのときはどこかで見た人だとおもったようですが、あとで確かめるとやはり、京都市会議員で車を運転して下さった方に間違いのないと思い、確かめたくてメールをしたとのことでした。ちょうど皆さんがリガにおられたころだと思うので、お会いになっていたことは間違いのないと思います。」

